

リスト出版。)

- 河野大機編著(1901)『ドラッカ』文眞堂。
 豊田恒(1900)『非營利組織研究』文眞堂。
 島田恒(1900)『新版 非營利組織のマネジメント』東洋経済新報社。
 三河公(1901)『ドラッカ、その思想』文眞堂。

第8章 知識、技術、文明

井坂 康志

ドラッカの技術論

第一次世界大戦以後、ドラッカは社会構造と文明の觀察にめどつを、技術や知識に関する発言を折に触れて行つたことにもつても自らの思考様式を明らかにしてきた。そのノートについて戦前における政治学者、戦後におけるマネジメント研究者の余技というにはあまりに深遠な暗示をはらむものがあつた。むしろ、そこには彼のマネジメントの代表的な著作群にも濃厚に息づく独自の方針論の原型と本質を見ることが可能である。

ドラッカの創意になるマネジメント体系それ自身もいかに巨大とはいえ彼の広大無辺の思想的當為の一角を占めうるものに過ぎない。戦後、産業社会成立の条件を標榜し続けたドラッカにとって、技術や知識の領域における論述は彼のマネジメント思想及びその思考スタイルの命脈を象徴的に表現するものと考えてもよい。さらに言えば、さほど華々しくないものの、そこにはむかつ一つの野心的試み、すなわち脱近代への通奏低音を聞き取ることさえ可能である。これらのも、技術論がマネジメント学者の越権と見なされようとも、それがドラッカ自身の体系的発言の筋道から離れて通るゝものではなきものであつたことは間違いない。ただし、彼の発言が一連の知

識や技術の論議において、一貫して傍流以下の位置しか占めなかつたのは、彼の考える技術が後述するよつなかきわめて限定的かつ特異な視点でしか語られなかつた事実と深く関わつてゐる。それはあえて言へば、技術を語らずして技術を語るといふ一風変わつた方法によつていた。特にそれが反ナチズムといふ抜き差しならぬ危機の政治的発言を経て、すぐれて近代合理主義への批判的意図を濃厚に滲ませていたりとも、それに一役買つてゐる。

そのことを傍証するにすればこの努力は必要とされない。ドラッカーの思考スタイルとは、彼が自ら培い自らに合う、いわば熟練の職人の手になじんだ道具にのみどにして深化・発展をせつゝ、常に新たな知的領域に挑戦していくプロセスであつた。それは言い換えれば、彼の知的陶冶の過程であるといふに、一流の觀察者として「腕を磨いてきた」軌跡でもあつた。その知的格闘の過程に見られる一つひとつの課題を振り返るとも、われわれは個別具体的なるのとの理解方法が彼の世界観・文明觀と深奥部において共鳴する事実に気づかぬわけにはいかない。ソリで注目すべきはまさに彼の手になじんだ道具、すなわち思考方法がどのようなものであつたかにある。手にした道具とその使用法ほどにその人の世界觀を雄弁に物語るものはない。

同時に、産業や組織、ひいては社会構造から文明全般に至る多様な関心領域の一つひとつは細部から巨部まで一貫したスタンスによって差し貫かれていた。しかも、彼の視角や思考スタイルは最晩年にいたるまで初期のそれとはほぼ変わらなかつたりとはわけても注目に値する。彼は一〇〇五年五月に現在進展する技術的变化を語るに際し、次のよつに述べているのがその現れである。

「知識が社会の中に座り社会の基盤になつたことが、知識そのものの性格、意味、構造を変えた。この断絶こそが最も急激であつて最も重要である。実をいうと、知識労働の生産性は一五世紀のグーテンベルク

による印刷革命以来、たゞして伸びていない。(略) さもさう再び技術が教育を通じて文脈を変える。(略)
情報技術によつて教え方が変わり、驚くべきことに、教えるひとの中身まで変わっていくはずである。」
むしろドラッカーは現代の多様な技術状況から生み出された知識や認識について、ようやくそれらを歴史的かつ体系的に扱つてゐる段階に入つたと見なしていただきが上記から読み取れる。それは知識と社会との相互交流における絶えざる応答、フィードバックの結果明らかとなつた知識社会の一つの中間決算にも相当する見解と見られよう。

人と技術

最初に明らかにしておかなければならぬのは、彼は技術者でも工学者でもなかつた事実である。彼は客体としての技術を扱つ者でもその専門家でもなかつた。彼はほほ独学で技術に関する膨大な知識を身に付けたと考えられるのだが、その知識を政治、経済、社会、教育等の広大な領域における鍵概念として用ひてゐる。自らの関心範囲の基本的な性格について彼は次のよつて説明を行つてゐる。

「技術とは自然のものではなく人のものである (Technology is not nature, but man)。道具についてのものではなく、人がいかに働くかについてのものである。人がいかに生き、いかに考えるかにかかわるものである。(略) まさに技術は人間の延長であるがゆえに、その基本的な変化はわれわれの世界觀の変化を現すとともに価値觀を変化させる。」

彼は技術を「人」としてゐる。すなわち、それは客觀的かつ普遍的な存在ではない。一元的ではなく、多元

的・複層的構造をはらむものである。むしろその性質は解釈する側の知覚的次元に属する知識の一形態であつて、しかも「人がいかに働くか」についてのもの、簡単に言えば仕事に関する概念であつたことがわかる。そのような考え方には、彼が他に先駆けて主張した知識の概念においても同様である。

技術概念を知識の一領域とするならば、ドラッカーの知識概念は、経験や解釈を不可避とする行為論を包摂する点において、理性主義的知識概念と様相を異にする。ドラッカーにおいては全体と諸部分の統合を異なる次元のものとして捉えるのみならず、さらに機能の過程において認識作用の能動的性格にまで踏み込む側面をも併せ持つものだった。そしてついにこそドラッカーの技術のみならず、あらゆる課題に対して示された解釈構造の原型を読む鍵が存在する。

その点に留意するとか、まことにドラッカー自身が技術の問題を扱うにあたって強く目を向けることを求めたのが、M・マクルーハンであった。マクルーハンの言説は、「ドラッカーの技術理解にあたって、燃り系の役割を果たしている。彼がマクルーハンの技術論を評価しほぼ同様のこととを次のようつに述べたのはその証左であろう。

「マクルーハンにとって技術とは、人間完成の道具だった。技術によつて人間は、自らを変化させ、成長させる。他の動物が進化の力によつて新たな器官を発達させるように、人間は新たな道具によつて自らを成長させ新たな存在となる。(略)『技術は人の一部である』。」⁽³⁾

ここから織われるといひとして、ドラッカーの想定する技術とは、主体による事物への内在化、すなわち知覚的認識を介する能動的意味付与と道具との一体化、そして人格的調和を促す知識であつた。そこにおいては、技術は認識主体の能動的な働きのうえに成立するものとされ、さらに技術は主体に受容化され一体化されるものであつて、その意味ではコートのようつに着脱可能といつよりは、皮膚や器官のようつに身体の一部をなすものと考えられた。それは主体にとって行為論的次元から一歩進んで存在論的次元、そして責任論的次元にまで融合しうる技術觀であつた。

知覚と脱近代への企み

ここで指摘できる特徴が少なくとも1点ある。

第一にドラッカーにおける技術觀には知覚の重視がある。それは客観的だるところに偏重した近代西洋の思想潮流をふまえつつ、その理性主義的病理への新たな論理の提示と考えられる。

そもそも彼の知識概念には一種類が想定される。目的に関する知識（命題知）と方法に関する知識（方法知）である。前者を西洋哲学において追究され、ひいては近代合理主義の要諦を構成した知識觀とし、後者をその過程で知識の名に値せぬものとして抑圧・排除されてきた行動のための知識とする。主として『断絶の時代』で強調された「知識社会」は、後者を中心しつつ、新たな次元での体系化を志向するものだった。

といつのも、いかに多くの命題知を持つとも、技能としての方法知、すなわち知覚による行動のための知識を持たないならば依然対象に通曉しえず、具体的成果につながる知識と呼べりとはできない。いかに普遍的知識に通曉してもとも、それだけで現実問題について適切な推論をなしつらわけではなし。さらに、ドラッカーにあつてはいかに多くの正しい命題知を持つても、それらを適切に実践行為に適用できるだけの知識を持たないものであれば行為としての正しさを手にするともできない。ここで問題となるのは、命題ではなく方法にあ

る。彼の発した問いに即して考へるならば、「自由な知識社会とは何か」よりも、「知識社会はいかにして自由たりうるか」にあつた。

では、推論を適切な行為に結びつけるための方法知とはいかにして獲得されるのか。思索と実践の反復的応答（ファイードバック）を通してなされるとするのが彼の立場だった。技術についても同様である。技術を「人に開くるもの」とするならば、そこには人間社会との適切なファイードバックが不可欠なものとなる。そのファイードバックを可能とする方法知への変換装置の一つとして彼が技術を捉えていたことは明らかであろう。

そこには命題知偏重への批判的根柢がすでに潜んでおり、かかる価値判断が彼にあつたことは明らかである。しつゝのと、知覚重視の思考法そのものが近代合理主義への批判的根柢を形成する推進力となりうる。そもそも彼の主として依拠する保守主義的アプローチに立つならば、いかなる技術も知識もその合理性や客觀性のみを判断基準とはしない。それがいかなる認識をもつて始まり、いかなる構成によるものかは、社会の自律性、人間の尊厳、そして政治的正統性にとつて問題とはなりえない。系統的に整序されてゐるか否かにかかわりなくすべての技術が平等に独自の合理性を主張でも、普遍性に対して闘かれているのでなければ、自由な知識社会の名に値しないものとなる。

そのように捉えていくれば、おづら社会や人間意識に引き寄せて理解していく知覚重視の手法そのものが、技術中心的な視角を通して近代を把握する合理主義の硬直性を暗に批判するものと考えられる。

人間の延長

そして、もう一つの論点は、技術を「人間の延長」と捉えた点にある。ハリでいう人間の延長とは何を意味するのだろうか。その点を探求するためには、方法知における知覚的認識の態様をやや別の視角、すなわち道具の観点から明確にする必要がある。

知覚とは意味解釈に関わるプロセスである。ドラッカーの比喩によれば、われわれは「C」「A」「T」の各アルファベットをそれ部分として補助的に使用するじやにはじめて全体としての意味（CAT）を獲得することができる。すなわち、全体（CAT）と諸部分（C」「A」「T）との関係を解釈し、一定の意味を付与する行為が知覚の作用といつていい。

同様の構図を人が「いかに働くか」についての道具としての技術、すなわち仕事に墨を換えてみるとどうなるか。比較的新しい道具としてのコンピュータを考えてみるとじや、コンピュータ・プログラマーがプログラミングを行つ際に、道具としてのコンピュータを焦点的に意識してはいない。もしもしたとすれば、彼は対象としての仕事を適切に捉えることができなくなるはずである。

同じじりには外科医による手術についてもいえる。いかに最新鋭の機器を使用してもじや、外科医は腫瘍の摘出や患部の縫合において道具を補助的に意識するのであって、それらを焦点として意識し制御しようとすれば、動きはほとんど不器用なものとなり、目的達成は不可能となるはずである。ハリの場合、外科医が焦点的に意識するのは、患部治療といつ目的であり、道具の動きは目的に対して知覚的に統合されなければならない。これが「部分は全体との関係において存在しつるに過ぎない」の意味である。

すなわち、道具とはそれが補助的に意識されるじやにのみ、全体の有機的体系において意味を持つ。換言するならば、道具としての技術は補助的に意識し使用される限り、主体の延長なし一部となる。これがドラッカー

の言う「技術は人間の延長」の真意であろう。すなわち、そこでは技術は人間の一部であり、それなくして現実を知覚するよりも「器官」となる。それがゆえに、その基本的な変化はわれわれの世界観の変化を現すとともに価値觀を変化させる。いわば皮膚の「」とく有機体の内部と外部のフィードバック器官として機能する。

さらにドラッカーにおいては技術とは知覚的次元のみならず、行為論的次元によつても捉えられてきた。彼は知覚的作用による構造を存在論・責任論に拡張することで新たな地平を切り開いている。技術と主体との関係性を事物と意味の関係性に一般化して考えてみると、知覚による意味把握とは、単に特定の技術が主体に外在するものとしてではなく、目的論的有機性を獲得する限りでそれを主体に内在化し、主体の一部をなすものとなりなければならない。その場合、技術とは主体と一体化する点において、存在論に融合される。

そのとき技術は人間意識の一部に取り入れられることで、実践という形をとつて人格的なコーシストメントをもはかられる。その認識・実践に関わる一連の行為は主体による能動的関与・責任をともなう選択を不可欠のものとする。かかる知覚的統合によつて獲得される技術は、それがいかなるものであれ、認識主体と密接不可分の関係性を有するものとなる。すなわち、技術の使用には人格的責任がともなう。そのことは、行為論的知識が意味解釈と実践的適用を経ることで、主体の存在の一部をなし、認識主体の人格・責任に融合するのを意味する。

技術のメディア論的次元

以上のとおりにドラッカーにおいて技術とは存在論・責任論に至る人間の意識レベルに同化されるものとして扱えられた。それは、技術がメディア論的次元において捉えられたことを意味する。以下で言うメディアとは、

M・マクルーハンの使用した語彙と基本的には同義である。マクルーハンの用語法に従つて、メディアとは單に情報伝達機関にとどまるものではない。マクルーハンの考へでは、人間の身体器官の機能を拡大する人工的な装置はすべてメディアである。情報伝達機関としてのメディアは、特に視聴覚の感覺器官の拡張に相当する。すなわち、メディアとは「人間を拡大する技術」であるといふ。そしてその引き起こす変化は、技術としてのメディアがもたらした新しい尺度に由来するものと考えられた。マクルーハンによる名言として『メディア論』に見られる典型的なものを一つほど例示してみたい。

- ・「タイプライターは、活字がもたらした従来の動向をさらに堅固なものとし、綴りと文法を規制するのに直接的な影響があつた。」
- ・「電話が社会にもたらした最も意外な影響は、赤線地域を廢止しコールガールを生み出した」⁽⁴⁾
- 前者では、タイプライターという技術は、社会という一つの経路（チャネル）をただじつて、結果として標準的な語法や文法を創造するのに力を発揮したと主張される。後者では、電話の出現によつて、風俗街は物理的な区画に存立する必然性を急速に失い、結果としてそれらは消滅の方向に向けられるといふに、移動体としての新たなる形態での出現を促したものと主張される。ともに、社会的・人間的知覚作用の帰結として生じた変化であり、技術そのものから必然的に導き出される現象ではない。そこでは客体としての技術よりもそれに対する人間社会の側の意味解釈、そしてそこから引き起こされる行動変化がその本質と捉えられている。

マクルーハンが述べたのは、メディアにとつて意味を持つのはその実質的な内容ではなく、メディアそれ自体であるといつたことだつた。それをマクルーハンは「メディアはメッセージ」という切れ味の鋭い一文を持って表現した。そのようなメディアの理解をドラッカーの思考法は忠実に反映している。といつてもか、ドラッカー

自身はマクルーハンに見られる「人間の拡張」の語彙を意識的に使用したものと見られる。一例として、『断絶の時代』には次のような表現がある。

「今日のグローバル経済は、映画、ラジオ、テレビという新しいメディアによってつくり出された一つのパーセプションである。(略)世界は、マーシャル・マクルーハンいうところの地球村となる。今日の大陸間の関係は、一八、一九世紀のスラムと高級住宅街よりも緊密である。(略)これらの電子メディアは、物を伝える。経済を伝える。グローバルなショッピングセンターを生み出す。これもまた新しい現象である。しかもそれは、新しいコロニーを生み出す。」⁽⁵⁾

ここで彼は人間拡張の諸相として、すなわち知覚(パーセプション)の補助作用としてのメディアとしての技術に着目しているばかりか、その延長線上にあるマクルーハンの概念「地球村(global village)」の到来さえ確かなものとして受け入れている。

技術の発見——マクルーハンとドラッカー

先に道具はそれ自体が世界觀を反映すると述べた。技術をメディア論的に捉える手法は、ドラッカーの世界觀の鍵となるアプローチである。かかる彼の考え方を見事にコンセプトとして示し、言語化に成功したのがマクルーハンだった。マクルーハンが活躍した一九六〇年代、そして七〇年代のはじめについて、ドラッカーは次のように記している。

「あの一〇年は、外観だけが反技術だったに過ぎなかつた。実際には、技術はあの一〇年に発見されたの

だつた。」⁽⁶⁾

この「技術の発見」なるフレーズに込められた思いが、ドラッカーのマクルーハンへの畏敬の念を如実に表現するものといえる。では、そのフレーズに対応するマクルーハンの思想内容とはどのようなものであつたのだろうか。少なくともそこにはメディア論的次元を意識的に採用した理由がなくてはならない。

ドラッカーの技術觀をメディア論的に読み解いていくが、その理解にはマクルーハンとの類似点を追求するほうがより効果的とも言える。まず容易に指摘可能なのは、ドラッカーとマクルーハンの一人について、印刷ほうがより効果的とも言える。まず容易に指摘可能なのは、ドラッカーとマクルーハンの一人について、印刷技術に格別の地位が与えられる点である。むろんそれは単なる偶然ではない。そのことはある企みを静かに反映するものとして見てよいであろう。その根柢はむしろマクルーハンの側からのドラッカーに向けられた発言によつて明瞭に知ることができる。

「ピーター・ドラッカーは……われわれの時代の『技術革命』について次のようについている。『技術革命について、これまでどうも明らかでなかつた点がひとつある。それはこの点が明らかにならないがさり技術革命についての眞の理解が得られないほど重要な点だ。つまり、それは技術革命を解き放つことになつた変化、人間の姿勢や信念や価値觀における基本的な変化が生ずるため、その前に一体何が起つたのか、ということである。いわゆる科学の発達それ自体は、わたしがこれまで不そつと試みてきたように、この根本的変革とはほとんど関係をもたなかつた。しかしながら技術革新に先立つて一世紀前に、一大科学革命をもたらした世界觀における一大変革のはうは、どのくらい〔今日の技術革命に対して〕責任を持つものであろうか。本書は少なくともドラッカーのいう『これまでどうも明らかでなかつた点』が何であるかを解き明かす試みである。」

彼の言う「本書」とは、主著『グートンベルクの銀河系』である。本書はドラッカの言う近代を成立させた変化を探求し、それに回答を与えることを企図して書かれている。そこで探り当てられた動因がよく知られるように印刷技術の発明だった。

技術の機能条件と脱近代への試み——印刷技術の解釈をめぐって

それでは、メディア論的次元で印刷技術とはどのように捉えられるのだろうか。マクルーハンの発言の要旨はメディアを人間そのものの拡張と捉えた点にあつた。彼の頭脳を捉えた主要な問題関心とは、メディアとしての技術であつたことは間違いない。しかし、人間意識の外化をともなう技術は歴史上多くあれど、印刷技術およびそれによつて「発明」された印刷本だけが破格の扱いを受けるのはなぜか。

まず、書き文字の誕生から印刷技術の発明を経て、近代社会は印刷された文字の影響を多分に受けて成立したものとする。文字文化の特徴は、第一に視覚優位にある。そこでは知覚の働きよりも、精緻な分析や総合的な論理構成のほうにより高い説明力が付与される。あるいは、具体的な事物よりも認識の客觀性、抽象的な理念や体系のほうに価値があると見なされる。それらの觀念は文字文化の爆發的普及の結果として立ち現れた文明史的な認識構造の変化と捉えられた。その一つの帰結として、世界を分節化し、物質化し、空間に配置するといったことで、世界や自然を整序すべきとする考え方方が人々の頭脳を支配する。すなわちドラッカが「近代合理主義」として批判対象とするところのものが印刷技術を起点として成立していくとしたとする見解である。『グートンベルクの銀河系』が提起した軸心的論点とはまさにそこにある。同書の副題は「活字人間の形成」(The Making of

Typographic Man) である。メディアを人間の意識が拡張されたものと言ふならば、近代人とは活字人間たらざるをえない。そこから近代なる人間理性の銀河系が創生されていくとする。

同様の思考様式はドラッカにおいても見られる。たとえば、ドラッカは「活版印刷が知識とするべきものを規定した」事実を受け入れ、自らの知識観の権とするのみならず、その帰結として「印刷された本が教授法と表現法だけでなく教授内容まで放り、結果として近代大学を誕生させた」ことをも事実として認めている。印刷技術によって大量生産されるにいたつた印刷本の出現を、単なる商業上の部分的な技術規定から区別して、世界觀そのものの成立の基盤から問題とする。印刷本を近代合理主義を創造したメディアと捉える。彼はさらに進んで、そこから「西洋」なる普遍的全体を把握する立場が生まれ、そこから近代の思想やイデオロギーが立ち現れるにいたつたとの見解を示している。

いずれにせよ、彼は技術をメディア論的次元で理解したために、印刷技術を真の情報革命であり、人類の文化・文明を変えたものと洞察した。近代なる思考様式の全体が徹頭徹尾印刷技術の浸透に關係し、また技術と社会との相互の文化的基盤に關係するとの認識をも示している。技術とは彼にあつてその時々の社会的存在形態と結びつき、存在の意識を変革せつくる運命的な結合と見なされた。

認識作用の能動的性格

ドラッカにあつての技術論とは単なる認識レベルのみではなく、同時に存在論にも接続するところを先に述べた。仮に一般的な技術概念を「人が何をいかにして知り、実践しつるか」に関する領域とするならば、それは人

間の認識のみならず存在論をも内包せざるをえない。

合理主義的人間理解からすれば、技術は理性概念たらざるをえない。したがつて、技術とは客觀性と普遍性を意味するものとなり、同時に主觀的で偏見をばらむ知識はその名に値しないものとなる。

しかしドラッカーの技術觀は、主觀や偏見を不可欠とする存在論レベルを包含する意味で、理性主義的技術觀念とその様相を異なるものとする。むしろドラッカーの所説はその技術に関する思索の出発点において、認識作用の能動的性格にまで踏み込みつつ、そこから最深部で一挙に近代合理主義批判に接続するものだつた。

すなわち、印刷がわれわれの意識をテクスト経由で形成するよう圧力をかけ、そこから一定の客觀化を過度に重んずる思考様式を生み育み、ひいては新しい制度や文物、そして新しい人間像・社会像が形成されていった。とするならば、彼は近代を創造した印刷技術および印刷本について思ひをめぐらせ、その意義を十分認めた上で、それを部分的に乗り越えなければならぬといつた。そこに彼の近代批判の要諦がある。

そのような企みは彼のアネシメント著作の隨處にも見え隠れする。初のアネシメントの体系的書物『現代の經營』（一九五四年）において、「われわれの文明は、印刷された書式の魔力にとらわれている」との見方を示す。書物の成立に近代そのものの形成プロセスを見出し、近代人がその呪縛にとらわれているとの見解の一例である。

そもそも彼の技術觀を吟味するにあたりマクルーハンが重要となるのは、マクルーハンがそうした臨近代的なアプローチによる技術理解、すなわちメディア論的視座の出発点を提示したためだつた。それがドラッカーが暗黙のうちに持つ思考方法を言語化し、技術、社会、文明を意味論的に紐付ける撫り糸の役割を果たした。

では、近代を乗り越える方法とはどのようなものであつたのか。それは因果的なものといつたりか、むしろ事

象がいかに解釈・適用されたかに力点を置くものとならないをえない。同時にそこでは、技術の問題が、人間社会の意味、解釈、行動、責任の問題に置き換えられて理解されなければならない。次のようが記述がある。

「知識とは、本に書かれていることである。しかし、本にあるだけでは、たんなるデータではないにしろ、情報に過ぎない。情報は、何かを行つることのために使われてはじめて知識となる。⁽⁸⁾」

『教育ある人間』は、『人文主義者』の『教養課程』に見られるような書物偏重主義を克服しなければならない。さらに『教育ある人間』は、分析的能力だけでなく、経験的な知覚をもたなければならぬ。⁽⁹⁾ メディア論が人間の拡張を意味する限り、近代世界にあつては印刷物が世界の窓となる。印刷物を通して知識の内容と範囲が規定され、高等な解釈機能を含む全神経が印刷物を通して働くことになる。そのような限定的な視野から眺められた世界は、均質な断片の組み合わせに過ぎなくなる。まさに、印刷とは「脳に直接差しこまれたレンズ」であつて、そのために他の機能に支えられなくなつた意識は一種の麻痺状態にある。本来形態に意味を求めてやまぬ知覚機能は眠つたままである。そこから部分的に脱するといつたりにこそドラッカーの解釈構造全般を解明する鍵が存する。

文明の対話装置

上記の解釈方法には、必ずしもアネシメントを本格的に論じるようになる戦後のことでない。むしろ戦前から彼の思考システムに内在するものでもあつた。彼の依拠した保守主義の方法論とは、因果的説明によつて社会的諸現象の問題を解くことを意図するものではなく、対話論的な相互理解といつ異なる原理を提示するものだつ

だ。ドラッカーは技術革新の教訓として「技術自体の変化よりも、それが教育や学校のあり方、内容、焦点に引き起こす変化のほうが重要」としている。知識に関する専門教育の失敗を例にとり彼は次のように述べる。

「専門知識を一つの『知識体系』へと統合することができない『教養課程』や『一般教養』は、『教養』ではない。『教養』としての第一の責務、すなわち相互理解をもたらす」と、すなわち、文明が存在しうるための条件たる『対話の世界』(universe of discourse)をつくり出すことに失敗しているからである。⁽³⁾」

ここで彼は「対話の世界」の創造を文明継続の条件としている。対話とは受け手の側の能動的な理解や解釈によって成立する。能動的理義や解釈とは、対話におけるメッセージ内容が責任を伴いつつ運び取られたことを意味する。その場合、技術を因果の連鎖としてではなく、対話装置と見なすとき、その意味解釈、行動、責任の真の扱い手とは発明者でも技術それ自身でもなく、同時代の社会全般、そして社会を構成する人々の学習能力と想像力、倫理感、教養の度合いに依存せざるをえない。すなわち、技術波及の結果自由な文明社会がもたらされるか否かは人間社会それ自身の能力次第となる。冒頭での引用「技術が教育を通じて文明を変える」とはそのような対話的技術觀に立脚するとき、その真意を理解できるように思う。

技術が社会との対話をファイードバックを促す装置として、人間における意識活動の総体に働きかけるのが、ドラッカーが「文明」と呼ぶことのものの転換に大きく関わるといふが。その転換はひいては社会のルール、慣習、価値観、そして人間の意識にまで及ぶ。彼が技術を捉えるにあたって、「実用の知識」「技能」「テクノロジスト」という言い方にその実際性と人間的次元を問題としたのは、技術に働きかけつつ技術に働きかけられるその動態的・能動的コメントメントを強く意識していたからにはならない。その意味では、彼の技術論を取り上げるにあたって、社会的対話装置における方法が重視されてきたのは、いたって当然のことであつた。

ここで彼が展開した論旨を追つていこう。われわれはすでに初期の著作から、対話的創造の観点から社会というテクストを読み込んでいく観点が、すでに共有されていたことに気づく。この見解は、歴史的・社会的対話の中では詔された価値観や信条を相対的に信頼に足るものとし、政治的正統性の淵源と考えた保守主義的な一定の根柢とも符合する。

しかし、対話的根柢への接近がより顕著になつてきたのは、やはり分析的対象を産業社会の中心機関たる企業に定めた一九四〇年以降であったといつてよい。その表れとして、マネジメントを構成する主要なコンセプトの一ひとつ、マーケティングやイノベーション、意思決定、戦略論といったもののアプローチがしづしづ異なる根柢の対話的枠組みによつて捉えられ、議論が深められてきた事案がある。しかも、それらは多くの場合、人間社会そのものの発展の舞台を提供するものであつた。彼はこうした根柢からあらゆる事象を社会的対話のコンテクストのうちに捉えていった。

では、そのような根柢にもじづくアプローチはどの程度妥当性を主張しているであろうか。

まずはもつて彼がそのような根柢をじつ最大の理由とは、技術そのものを合理的に捉えていく理解の仕方が、その社会的展開過程における多元性や複雑性、偶然性を切り落としてしまつ危険性があると見たためであろう。そこでは単に物事を因果の連鎖に還元するのではなく、その展開過程そのものをあたかも自らの生命力をもつて繁茂する緑の自然を見るかのうじて根柢で捉えていく思考が存在する。その意味では技術に対する根柢ほどに自律的存在としての人間社会を尊重する彼の価値判断が明瞭に表現されるものはない。彼が好んだ言ひ回しを応用するならば、重要なのは社会の「技術」化ではなく、技術の「社会」化であつた。その際、彼のとる姿勢には他の領域の言説にも共通するいくつかの特質がある。その方法論的基盤に迫つていこう。次のような諸点が確認さ

れる。

- (1) 近代合理主義とドラッカーリー的な技術観との間には、実質的または方法論上で基本的な相違が存在し、少なくとも人間社会の考察の原理として近代合理主義は不適当である。近代を乗り越える技術や組織を構想するためには、それ自体を一つの対話装置と見なす必要がある。その観点からメディア論的次元における理解が不可欠のものとなる。
- (2) 歴史において立ち現れた技術の意味を探索するうことは、それによって触発される意味、行動、変化を理解するうことでなければならない。それは技術を事実とその因果連関についての単純な客観的蓄積ではなく、社会的応答過程における内的連関の理解を重視したものとする必要がある。
- (3) ある歴史的な時期におけるあらゆる事実や出来事は、意味解釈という観点から説明しうるものであり、またその意味は常に他の予測不能な無数の意味と関わりを持っている。ドラッカーリーの技術論は、そこにはいかなる意味を見出すかという解釈と行動における能動性の観点から捉えうる。
- (4) こうした観点から、ひとたびある技術が社会に放されたならば、社会的現実の様相がその意味や価値を複合的に決定するうことになる。それはその技術が社会に「責任を伴いつつ選び取られる」過程といつてもよい。その態様とは還元主義的なアプローチでは把握不能なものであり、むしろ形態として知覚されるものとするのがドラッカーリーの立場である。

そのような技術の理解方法は、因果論的な見解を完全に排除するものではないが、必ずしも理解への恭謹をともにするものでもない。社会的対話装置から紡ぎ出される点において、そのようなアプローチが単にアネシメントの理解の手段としてだけでなく、ドラッカーリー的思考ともいいう思想的位置づけを基礎づける上でも足りない。

ない根柢をなすうことは確かである。

銀河を越えて

ドラッカーリーの著作に通底する一連の視座が、近代合理主義なるものの懐疑、あるいはその限界への認識に発しているのはまことに事實である。そして、彼が主張するポストモダンなるものは、精神的立場や思考様式が、その背後にある歴史的・社会的に決定された存在につながり止められた状態を問いつじゆに、そこから一步進んで世界に本来内在する自律性と主体的個との有機的相關にもとづく關係性の再構築に結びつくるのであつた。

彼がその主張の中で、デカルトやルソー、マルクスなどを名指して、社会的存在と理念との間の利害関係の結合、そしてそこから当然に導出される必然の進歩なる概念を野蛮で暴力的なシステムと断定するのは、そこに見られる合理からの束縛を一義的に主張する立場から脱却して、新しい社会的認識を取り開くうとする野心を示していた。彼にとって、組織のアネシメントをはじめとする方法の探求において、変転をもたらす社会との關係で、それは遙方もない多様性の追求と同義であつた。価値觀や認識、信条を単純に特定の理念に従属させるべきわめて粗っぽい方法は我慢のならないものだつた。その問題意識を明確化をせるにあたり、組織のアネシメントとともにもう一つ立ち現れる重要なコンセプトが技術、知識であつた。

再び彼自身の言葉を引くと、彼は一四五五年のグーテンベルクの印刷術の発明よりも、その後六〇年を経て社会に立ち現れた低価格かつ大量頒布の印刷本の普及に実際的な意味を見出している。彼の技術觀を象徴するところに、当該技術の持つ人間的・社会的影響に焦点を合わせたことを示している。彼は技術の本質を技術以外の自

律的で多様な人間社会の能動的な解釈と行動、責任に見出したのだつた。

こうしてドラッカーは、その時々に変転の圧力に晒される世界を捉えるために、いかなる技術がいかなるメディアを通して、いかなる社会形態が形成されるかを問うことになる。そこにおいてこそ世界と世界観のブリッジを担う概念が、モダン、ひいてはポストモダンといった文明史的視野を提供した。技術は新文明の対話装置であり、新社会の酵母であった。

他方でティラー主義を高く評価したことからも知られるように、産業社会との関係では、ドラッカーの技術觀は合理による体系を補完しているように見える。しかし、彼の技術に関する叙述をさらに深く読んでいくと、ポストモダンという歴史的視点の導入にも見られるように、決して大組織との結びつきによる生産性のみを意味するものではないし、また産業社会に一義的な因果的に關係づけられるものではないことがわかる。

むしろ、ドラッカーの技術に関する一連の見解は、より広い文脈に発する彼の世界観たる正統保守主義におけるアプローチの重要な支流をなすものと考えてよいであろう。しばしば指摘されるように、初期の二部作（『経済人』の終わり）『産業人の未来』『企業とは何か』）で、すでに方法論や理論展開はほぼ確立されている。かかるアプローチとはその背後にある世界観の基礎的性向の表れであり、その創造者こそがメディアとしての技術であつた。

いずれにせよ、こうしたドラッカーの時代認識や世界観、基礎的方法論をだしつけていく限り、技術をめぐる議論が単に組織のマネジメントを補完するものに留まれば、むしろそれ以上の深い実行性を持つて彼の基礎的根柢に迫るものであることがわかる。それを明らかにするための一つがメディア論的次元からの接近であつた。

「今日の電子時代においてはデカルトは粗略にあつたわれはじめている」——。マクルーハンはこんな暗示的

言辞を吐いている。印刷による活字メディアがデジタル化するとき、それは形態としてのメディアとともに、人間の大脳に差し込まれたもう一つの眼が根源的な変化を余儀なくされるることを意味する。脱近代が現実化しつつあるなかで、次なる世界がどのような相貌をとるのかはまだ見ていないものの、ドラッカーならそれが自由な知識社会になるかそうでないものとなるのは現に二一世紀を生きる君たち次第だと言つたに違ひない。

注

- (1) ドラッカー(1900年)。
- (2) ドラッカー(1900年)、三七八—三九九頁。
- (3) ドラッcker(1900年)、一八五頁。
- (4) マクルーハン(一九八六)、一七〇—一七四頁。
- (5) ドラッcker(1900年)、六六一六七頁。
- (6) ドラッcker(1900年)、一八五頁。
- (7) マクルーハン(一九八六)、五〇六頁。
- (8) ドラッcker(1900年)、一七六頁。
- (9) ドラッcker(1900年)、一七〇頁。
- (10) ドラッcker(1900年)、一七四頁。
- (11) マクルーハン(一九八六)、三七三頁。

【参考文献】

- P・F・ドラッcker／上田博生訳(1900年)『断絶の時代』ダイヤモンド社。
P・F・ドラッcker／上田博生訳(1900年)『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社。

- P・F・ドラッカー／上田博生訳（一〇〇八）『傍観者の時代』ダイヤモンド社。
- P・F・ドラッカー（一〇〇五）（インタビュー）（五月七日実施）『週刊東洋経済』一〇〇五年七月一日号）。
- M・マクルーハン／森常治訳（一九八六）『グリーンベルクの銀河系』みすず書房。
- M・マクルーハン／栗原裕・河本伸吾訳（一九八七）『メディア論』みすず書房。

第9章 社会生態学 ——知的新領域を開く

阪井和男

社会生態学とは何か

ドラッカーは自らを社会生態学者と規定した。彼による明確な自己規定はこれのみである。社会生態学の役割は「見て伝える」ににある。ソциオドラッカーにおける合理性とは、因果性や無縫的運動ではない。対象はそれぞれに自律性を持つとし、それぞれの合理性を持つものと考える。

合理性の根柢とは、五感による理解、すなわち認知や認識に求められる。社会生態学とは、認知の対象としての世界を現象的にであれ物理的にであれ、正確に記述し表象することがすべてである。

彼は実証主義、構成主義による単純な世界像にもはや手せず、むしろ自然発生的で高度に組織化された秩序のほうに思いを馳せる。彼にとって、市場や組織といった社会的制度は、あたかも生命体同様である。

ドラッカーは社会的構成物も自律的運動体、一定の目的を志向する存在とし、そのアプローチはまず自然生態が持つ自律性を社会に拡張する。意図的に設計されたのではない秩序が、それ以外の仕方では持ちえない合理性